千里山幼稚園物語（その二）

＊＊＊ 千里山グレース幼稚園

保良貞四郎・せき とともに ＊＊＊

編集部

（文中敬称略　文責柿崎）

はじめに

前号（八号）で、家なき幼稚園と千里山幼稚園を特集しましたのに続き、本号では千里山グレース幼稚園**（以下グレース）**を特集することにいたします。

家なき幼稚園・千里山幼稚園が戦前に閉園になって、生い立ちも突き止めることができないまま終稿しましたが、グレースは初代・二代両園長の保良貞四郎・せき園長の計画のもとに創設され、三代目徹氏が創設時の園児で現園長であり、今も幼稚園は健在という前号とは情況の大きな違いがあります。

歴史を紐解くのも卒園生を探すのも苦労要らずで、過日の卒園生の集いはミニ千里山会のような雰囲気で開催することができました。

グレース七〇年の歴史を知るには、まず八九年に刊行された現園長の編著による「五〇年のあゆみ」がありますし、日本の福祉の先達としてのせき夫人を第三者がテーマにした書籍もあり、現在の姿は素敵な入園案内で知ることができます。グレース(神の恵み)は、せき夫人が渡米した最初の日本人教会でいただいたクリスチャンネームです。

昭和十二年七名の園児(一人は現園長徹)から始まったグレースは、現在の四〇〇名になって久しく、毎年三歳児を主体に若干の四歳児を加えて一二〇名～一五〇名が入園してくる。園長以下四〇名の教職員が保育にあたっている。敷地は創立当時と変わらず約三、〇〇〇坪（一〇、〇〇〇㎡）の中に園舎・運動場・諸施設とゆったりした緑を残している。メーンの保育室、コンサート会場にも体育館にもなる多目的ホール、お伽の国にいるような図書室、思う存分遊べる庭園とプール、裏山にはフィールドアスレティック・・・、ここには千里山を中心にした北摂の幼児達が申し分ない環境のもとで豊かに育まれている。私立幼稚園だから

できるのであり、競って入園させたい親達の気持ちが伝わってくる。

日本は少子化傾向がつづき昨年からいよいよ人口純減(死亡数より出生数が少ない)に入った。だが公立や大学併設の幼稚園との競合の中で、一部には母親達のステータスともなっているグレースの今日あるのはどこに由来するのか！？

創立者の夫妻、貞四郎が亡くなられて半世紀、せきが亡くなられて四分の一世紀になる。現園長が園長になられて三〇年になるところから、並々ならぬ徹の経営手腕に私共千里山会員は拍手を送りたい。

この物語を書くにあたって、集まった園児は創設後間もない頃から初代園長が亡くなられた頃までの方々ですので、奥様(二代目園長)とお二人のご生涯をまとめました。また一般読者の方々には千里山にこんな素晴らしいご夫妻が居られたことを知っていただき、併せてグレースの歴史の一端をご紹介させていただきます。筆の足りないのはどうかご容赦願います。

× × ×

保良貞四郎を思う

グレースは昭和十二年四月に奥様と二人で創立されました。初代園長は保良サダシロウが本読みですが、滞米中に結婚されたとき夫人とイニシャルが同じになるので、テイシロウと読むことにされました。筆者が千二小に通っている頃は“駅の向こうで幼稚園してる小父さんと小母さん”子供心にも親しみのあるお二人のお顔が印象的でした。

この編集に当たり、手元の昭和八年四月の千里山世帯主一覧を見ると、四〇五番地にお名前が見られ、区域から噴水の前を斜め右に広い坂を上り、二筋目右側の辺りと思われます。昭和六年アメリカから帰国され、その二年前に先に帰国されていた夫人の大阪市北区萬歳町から移転しました。千里山の住宅地内にせき夫人と明確な事業目的をもって仮寓され（その頃徹出生、結婚は滞米中の大正十二年)、昭和九年に現在地に三、〇〇〇坪を京阪電鉄土地(株)から購入されました。

昭和十年十月に近い将来の保育事業・幼児教育事業を見越した自宅「グレースハウス」を竣工して、園遊会を数十人集めて催しています。これが貞四郎五〇歳

の時で、七一歳で亡くなられるまでの「グレース人生」の始まりでした。当時五〇歳は決して若くはなく、まだ人生五〇年といわれた頃で、男子平均寿命が五〇を超えたのは戦後のことです（企業の定年も五五歳、一生面倒を見るのと同じで目出度い初老の誕生の年でした)。貞四郎にとってそれは年齢的にも人生の集大成というか、それまでの五〇年は、グレースのために用意されたとさえ思えてなりません。

建物は現金で建て、残り(土地)は長期分割払いで購入しています。この土地はその頃「見渡す限りただ葛の葉の繁る草原で、ところどころに畑が見られるくらいの人里離れた感じの土地でした」とせき夫人は述懐しています。噴水を中心にした西地区は当時から一〇〇坪単位に造成されていましたから三〇区画分の広さです。経済性、立地点、地形など、たいへんな卓見で駅からは近く、丘を背負った南向きの広い地形は幼児教育には最適で、関大と千二小との三角形の頂点に当たり文教地帯を形成しています。

しかし創立当初は、当時の住宅の人達が線路を越して通園するのに難色を示した人もあったと思いますが、せきの保育理論と完全給食、貞四郎のキリスト教による教育、また諸設備の充実と野山のある環境等々を考え合わせ、少々遠くても通園の安全が確保されるなら是非グレースへ行かせようとする親も徐々に増えてきました。

しかし不運にも創立の昭和十二年の支那事変勃発は苦難の予告でもありました。十六年対米英開戦、十八年当局の命により園名を「千里（ちさと）幼稚園」と改名させられます。しかしグレースの保育の中核である完全給食は園内の自作農で最後まで頑張りましたが、戦況の一層の激化で警報が鳴ると園児の通園は阻まれ遂に休園に追い込まれます。その時の園児は三九名、千里山幼稚園閉園時の四〇名とほぼ同数となっていました。その上軍需産業(H社)からの園舎の買収に遭い抵抗の甲斐無く契約をさせられましたが、賢明にも「戦争が終わったら買い戻しの条件付」に頑張った夫妻の大きな知恵がこの後に生きることになります。

今回集まった二一名の中の半数がこの時までの園児です。そしてあとの戦後の半数は、園舎買い戻しから貞四郎が亡くなられるまでの十年間の、戦前とはまた違う貧困から再発足して、未来性のあるグレースの本格的な基盤づくりの時期に育成された園児達でした。

せきは共同経営者として目覚ましい働きをされましたが、園外の公務（後述）で東京に於ける政府機関の重要任務を果たさなければならない時期でもありましたし、徹はまだ大学進学期から東京の学生生活の時期に当たっていました。

貞四郎は大谷常保健婦(後の副園長)をはじめ少ないスタッフを総動員して再建に当たり、千里山の唯一の幼稚園となったグレースで園児を集め教え育てられ、昭和二一年「千里山グレース幼稚園」に復名を果たしました。昭和二七年 学校法人千里山学院 千里山グレース幼稚園として初代理事長に就任、将来多角的な教育事業が行えるような基盤を布かれ、昭和二九年にはＮＨＫがグレースの〝クリスマス会〟を放送しました。

昭和三一年惜しくも胃癌のため七一歳のご生涯を閉じられました。その年の園児は一六一名に育っていました。

初代園長の死によってグレースに宗教上の経営理念に変化がありました。（「五十年のあゆみ」現園長談話）

設立当初はキリスト教にもとづいた教育を行っていた。食前にはお祈りもした。しかし次第次第にキリスト教色が薄れ、保良牧師の死と共に完全に消えた。園長である私がキリスト教を信仰せず、また教師の採用にあたっても、キリスト教信者であることを条件としていないのだから、「信教の自由」に徹して、宗教に関しては各家庭の方針に任せる。（後略）

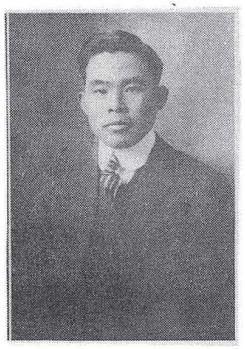
千里山会員の全てに近い人達が、イメージとして持っていたものが無くなったので記述しておきます。

× × ×

ここまでの、人間「保良貞四郎」の「千里山人生二五年」は、人生の終盤にあたる三分の一に過ぎません。中盤ともいえる帰国前の「アメリカ生活二五年」には、“駅の向こうで幼稚園をしてる小父さん”の親しみのあるお顔からは想像できない、苛酷な生活とロマンがありました。アメリカの大学を出て牧師の資格を持った学士さんに相違ないのですが、親頼みの生やさしい留学生とは訳が違い、多くの人生教訓が含まれています。またその前の序盤に当たる二一年は、本州最南端の山深い山林農家に生まれ、向学心に燃えて明治の時代に裸一貫太平洋を渡って行った、そこから略記しないとグレースを語れないことが解りました。その上で次の「保良せきを思う」で締め括ることをお許し願います。

貞四郎は一八八六年（明治十九年）本州最南端潮岬に近い現在の古座川町、司馬遼太郎「街道をゆく」第八巻にある熊野山塊の中の古座川筋にある三尾川村(みとがわむら)に生まれました。生家の一帯は「保良の荘」とも呼ばれ、山持ちの恵まれた山林農家に生まれました。勉強好きで向学心に燃える少年でしたが、祖父は上級学校進学を許しませんでした。当時の事情は、一日で往復できる範囲に中学校はなく、また祖父は山林の仕事に学問の必要を認めなかったのです。

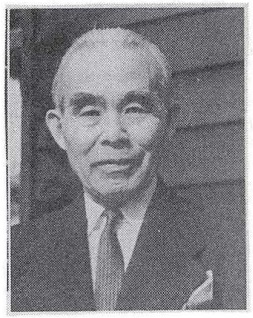
最初の出奔は大阪で、砲兵工廠で働き夜間は北野中学の前身(大阪一中)へ通っていたところを山へ戻されました。和歌山県は広島県と並ぶアメリカ移民の盛んな土地柄でした。日本が駄目ならいっそのことと、出稼ぎに出国する二～三人の友人に加わってアメリカに渡りました。その時すでに二一歳になっていました。まず安上がりの労働力を求めていた農場主のところからアメリカ生活は始まりました。東洋人への差別は激しく、鞭が飛んでくる苛酷な世界でした。それからも肉体労働者として雇ってくれる働き先を転々として、遂に州立南カリフォルニア大学に入学したのです。山林業の心得から「植物病理学」を専攻、しかしこれまでの無理が祟って結核に罹患しサナトリュウム入りしますが、当時の療法では体力勝負あるのみでした。大学は中退、九死に一生を得ましたが十年の年月を費してしまいました。その間神学を学び按手礼を受け、加州サンノゼの日本人教会で牧師をしていた時期があります。その頃小林せき後の夫人に出会い、病気も治って大正十二年に結婚しました。猛勉強を再開しついにデンヴァー大学に入学、卒業した時は四三歳になっていました。卒業アルバムには、主専攻：英語学・宗教学、副専攻：生物学、ユダヤ律法文学賞を受賞との記録が残っています。その年せきは先に帰国します。貞四郎はその後、シカゴＹＭＣＡの總幹事の職にありましたが、一九三一年（昭和六年）帰国し、間もなく夫人と千里山の人となりました。



最後に、現園長の父貞四郎に関する思い出の断片をいくつか挙げておきましょう。

父の苦労話を聞いて陰湿な印象を受けたことはなく、人種差別やいろいろな苦い体験を味わいながら、

共産主義の勉強も怠らなかった時期がありましたが、努力がそれなりに報いられるアメリカ社会を終生愛していたし、父は徹底した自由主義者でした。人間として優しかったし、園児達にも動物達にも慈父だったと思います。謙譲の精神を重んじる紳士でした。潔癖な性格の完全主義者だった一面は、かって植物病理学を勉強したり、長い結核との闘病生活から「細菌の常識」「結核について」の著書を出している科学者の一面との関連があるかも知れません。宗教に対してもリベラルな姿勢をくずさなかったし、聖書の求める人間像を身をもって実践しようとしたキリスト者でした。



と結んでいます。そしてややもすると、せきの影の人と思われがちな貞四郎のことを、グレースが教育機関として今日なお存続し得たのは父の功績であること、看護・保育に秀れた知識能力を持っていた母を見守り経営視点からの良き師であったこと、せきも貞四郎を精神的支柱としていたことを挙げています。理想的な組み合わせだったのです。

保良せき を思う

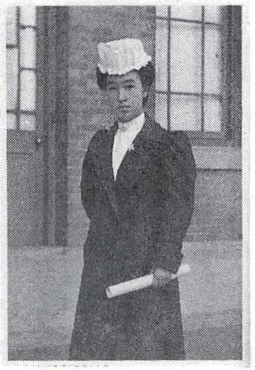
今回の集いに出席された園児にとって、せき夫人から受けた教育指導は忘れることができないと思います。

せきは、八七年の人生のうち、グレース創立前が四四年、創立後が四三年と奇しくも半生の分岐点になり、ここで先ず前半生を辿ってみたいと思います。

一八九三年(明治二六年)長野県の飯田藩士の家系小林家に生まれました。信州は蚕糸業が盛んで、教育熱心な県でした。父上は製糸工場を起こして一代で財をなしたといわれ、せきは物心ともに豊かな家庭環境に育ちました。県立飯田高等女学校に進み、テニスをしピアノを習えた謂わば良家の子女で、将来音楽学校の声楽科を目指していました。また飯田は早くからキリスト教の布教もなされていましたから、その雰囲気の中でごく自然に町のルーテル派の教会で洗礼を受けました。父親は自分の頃はまだ寺子屋時代で学校がなかったこともあり、娘には大層教育熱心でした。

しかし、せきにも大きな変化が起こります。当時としては当たり前のことですが、卒業すると、親同士が勝手に決めた造り酒屋の次男との結婚話に、会ったこともない相手との結婚に反発し、諏訪の同じルーテル派の教会を頼って家出します。そこでイエンニ婦人伝道師にキリスト教と看護事業の関係を教えられ、薦められたナイチンゲールの本に感動し、看護婦を目指す決心をしたのが生涯の仕事の始まりとなりました。

その頃看護婦学校は東京にしかなく、家を離れて東京に出ることに反対されましたが、漸く許しが出て当時日本では最高の看護教育機関だった慈恵会医院看護婦教育所に三一期生として入所し、三年間の高等教育を受け終了しました。その頃せきは伝道の仕事と看護の仕事に一体性を持っていたらしく、アメリカに渡って伝道師になると言い出したのには両親は驚き反対します。しかしせきの意志は固く、渡航費はイエンニ伝道師が工面し、親の援助なしでロスアンジェルスに向かいます。貞四郎が単身渡米した十四年後のことでした。



そこで先ず日本人病院で看護婦として働き、次ぎに語学スクールに通います。パサデナのＹＷＣＡ寄宿舎に入り、日本人留学生の母といわれたハリソン女史の運営する保育所で、週三日と学校の夏休みに助手として働きましたが、ここで女史から人間形成の基礎となる幼児教育の重要性と、宿舎の中で社会的マナーについても女史から学んでいます。この経験は後年グレースで大きく生かされました。しかし馴れないアメリカ生活と勉強のため体をこわしてしまい、当時は死病といわれた結核と診断され絶望に陥ります。

ところが人生なにが起こるかわからない。

小林せきは、その頃は九死に一生を得て快方に向かっていた保良貞四郎と出会うのです。貞四郎から、自分が入院していた時の優秀な医師の診断を薦められ、せきの受けた診断が誤診であったことが判りました。異境の地で何年間も棒に振るか死ぬかと思っていたのが助かったのですから、どれほど嬉しかったことか。

二人は結婚することになるのですが、それは二年後の話。貞四郎は結核で中退したため叶わなかった大学

での学位取得を、デンバー大学でチャレンジしていました。せきも当初は伝道師志望で渡米したのですから、貞四郎のデンバー大学の神学校に入ります。しかし貞四郎から「アメリカで看護教育を完了し、さらに大学に進み公衆衛生を専攻し、日本に帰って二人が一つの仕事に協力し合い人生を生き抜こう」と言われ、せきは言われた通りの道を歩き始めた。

せきはコロラド州の正看護婦資格(レジスタード・ナースRN)を日本人で初めて取得し、コロラド病院看護学校に入学し、卒業後デンバー市の訪問看護婦として二年間働きます。その頃は結婚していましたが一時別居し、ボストン近郊のベルモント市立伝染病院で修士課程を終えて、ニューヨークのコロンビア大学教育学部に入り、看護教育、公衆衛生、予防医学、栄養学を学びました。大学では担任教授のハドソン先生の薦めで奨学金も受けられたので生活もでき、大学付属幼稚園を視察する機会を与えてもらい、物心両面で担任教授のお世話になっています。せきの公衆衛生看護の実習はヘンリー街(NY市の死亡率・罹病率最高のスラム街)で、そのセツルメント(隣保事業、社会改良運動)は創始者のウォルド女史から直接学びました。

せきは、一九二九年(昭和四年)、父上病気の連絡を受け飯田の実家に戻ります。

渡米して八年、この間にハリソン女史・保良貞四郎・ハドソン教授の三人の方が、せきのエポックに登場しておられ、先には最初の灯をつけた諏訪のイエンニ伝道師の存在があります。せきという方は並はずれた純粋な意志の持ち主で、秀れた能力で脇目も振らず進もうとする向上心が他人の心を動かすのでしょう。確かに要所で白馬の騎士が現れるように見えるし、運の良い人には違いない。しかし、この人にはしてあげないといられない何ものかがあるから騎士も現れるので、どうも偶然と必然が一緒に来るようです。福祉の仕事と伝道の仕事が縄をなうように出てきて、伝道師になるのは、最後に貞四郎によって断念しますが、その後は一層すさまじい向学心を発揮して福祉の学究に進んでいく迫力は凄い。後に厚生省初代看護課長を退官した頃、参議院議員に社会党が押そうとし、いささか心が動いたときも貞四郎が断念させており、大きな節目での夫婦の絆の太さを痛感します。

昭和四年に帰国したせきには、東京の聖路加国際病院公衆衛生看護部と大阪の朝日新聞社社会事業団から

誘いあったが、昭和五年、朝日新聞社会事業団公衆衛生訪問婦協会主任として同協会を任されることになる。

昭和六年、貞四郎がシカゴYMCA總幹事の職務を辞して帰国し、二人は同労者、協同経営者として幼児の保育事業を起業するために、間もなく千里山を選び転居する。

そしてせきは貞四郎が他界するまで、学究を極めてきた公衆衛生看護の公的事業に傾注する傍ら、生涯の幼児教育の理想の場をグレースに求めました。

千里山会誌でのテーマはグレース幼稚園なので、せきの公的事業者としての一面は、門外漢の筆者がここで語るのは、その功績の大きさから僭越と思い、ご存知ない方のため主なる職名の列挙をもって代えさせていただきます。

昭和五年、　朝日新聞社社会事業団　公衆衛生訪問婦協会設立
昭和六年　個人雑誌「看護婦」創刊　(～昭16)
昭和十二年　現・神戸女学院大學　講師　(～昭17)
昭和十三年　公衆衛生訪問婦協会解散に伴い、私設萬歳町訪問婦協会設立し事業継続　(～昭19)
昭和十六年　現・大阪女学院　講師　(～昭20)
戦争未亡人援護のためグレース園内に小児園を設立　乳児二二名託児。(～昭20)
昭和十九年　同志社大学　教授　(～昭23)
昭和二三年　厚生省医務局看護課長(初代)
昭和二五年　米国看護情況視察　右退官
昭和二六年　保健婦・助産婦・看護婦法審議委員　(～昭28)
昭和三一年　保良貞四郎　死去によりグレース理事長就任

諸表彰　昭34・第十一回　保健文化賞、昭35・黄綬褒章、昭36・保健婦事業の功績により厚生大臣表彰、昭40・勲四等瑞宝章、日本看護協会・名誉会員

筆者は、戦前のあの時代に、せきが看護と公衆衛生事業を学究的実践的に究めた第一人者であったことがよく判りました。日本で保健婦を専門職種として、社会的地位の向上を図り、訪問看護婦事業組織を立ち上げた先駆者としての功績は測り知れないものがあります。関西の女子学生達に衛生看護の知識を植え付けた点でも、アメリカでの恩を日本で返したことになりま

したが、皮肉にもアメリカへの開戦の頃は、日本社会での実践に相当な挫折を味わっていたようです。

日本が破滅的な道を歩いていることは、よく判っていたでしょうから、仕事のベクトルはグレースの幼児保育に向かって行ったことは当然でした。戦後になり、軍需工場(H社)に買収されていた園舎を返してもらえず、吹田市や大阪府に掛け合っても埒があかず、嘆願書を作って上京し進駐軍公衆衛生部を使って運動したところ、一週間で返還されたのは、せきの働きによるところ大なるものがありました。その後、厚生省にせきの福祉全般についての高い能力を見抜かれ、いきなり本省の課長に任命された時は一大ニュースになりました。任期がきて、鳥が塒に帰るような気持ちでグレースに帰って来られたことでしょう。

それからの貞四郎と二人での幼児保育に専念できた年数が、あまりに短かったのは痛々しい気がしてなりません。

こんな述懐が残っています。

「幼稚園を始めて「一番の困難は経営費で、一週間一日も休むことなく、育児・家庭看護を教えたり、各所で講師などして朝から夕方まで働きづめに働いて、夜は準備に追われ十二時にやっと床に就くような毎日・・・・・」

貞四郎の死後、二〇年間二代目理事長を務め、昭和五一年勇退された時は、園児も現在に近い三五六名となり、三代目徹に引き継がれ、昭和五五年米寿祝賀会の五ヶ月後の十月永眠されています。

保良夫妻は、初めから千里山住宅の上の方の生垣のある一〇〇坪の敷地に住む方ではなく、熊野山塊と中央アルプスの中で育くまれ、アメリカの大草原を見ながら西から東まで横断して、それぞれ目的を達成して帰国し、東京より大阪を選び、千里山に自由の地を感じて夢の事業の実現に向かわれたお二人です。当時の住民の親達より一回りかそれ以上の年長夫婦でしたが、日本が十五年戦争を始めた最も悪い時期から敗戦後の混乱期に、いかなる困難にもめげず、それぞれ晩年と半生をかけて創られた結晶が「千里山グレース幼稚園」です。